

CheFuKo 通信



1. ふくしま被災地視察&お花見ツアー
2. ネパール支援・調査活動
3. ウクライナ支援・調査活動



みなさん、こんにちは。今号は2018年上半期の活動をまとめたものです。
 内容は「ふくしまお花見ツアー」、ネパール支援活動、ウクライナ支援活動の三本立てになっています。
 福島編では食品の放射性物質検査と風評被害について、ネパールでは地震で深刻な被害を受けたシンドウ
 パルチョーク郡の村の様子、ウクライナでは子どもの健康問題についてなど、活動の様子だけでなく、現地に
 足を運んだからこそ聞けたお話や実情もご紹介しております。
 この通信を機に、当団体の活動にご理解・ご協力いただければ幸いです。



福島 Fukushima



ふくしま被災地視察 & お花見ツアー

知っていますか？「ふくしま産」のこと～風評被害について考える～
今回のツアーの目的:「ふくしま産は安全！？ ふくしまのファンになってほしい！」



2018年4月8日 福島市花見山にて

今回で5回目を迎えるふくしまツアー。リクエストが多かった福島市の花見山でのお花見をメインに30名の参加者と1泊2日でスタディツアーを行いました。最年少は19歳、最高齢は70代と幅広い世代の方々と共に楽しみながら大事なことを学んで来ました。期間中は桜の開花のタイミングにも恵まれ、花見山ではカメラのシャッター音が鳴り止まない程の状況。とにかく絶景でした！！

今回、ツアーの一部になりますが皆様にも内容をご紹介します。いただきます。

1日目

東京駅に集合



小名浜魚市場見学(いわき市)



いわき・ら・ら・ミュウにて昼食

福島県農業総合センター見学(郡山市)



奥の松酒造見学・試飲・買い物(二本松市)



花月ハイランドホテルにて宿泊(高湯温泉)

2日目

ホテルから花見山へ出発

花見山でお花見・昼食(福島市渡利)



セテッテかしまにてお土産購入(南相馬市)



語り部による町案内(富岡町)



東京駅で解散



小名浜魚市場

安全管理は半端無かった！！ / このままでは小名浜の漁業は...



①数値基準は国の2倍厳しく！

国の出荷制限基準100Bqに対して福島県は50Bqに設定。2016年以降、実際に25Bq以上出た検体は6例のみでほとんどが不検出。

②出荷制限対象の魚は汚染が原因では無い！

現時点で10種類(クロダイ、サクラマス、スズキ、カサゴなど)に国が出荷制限指示中。理由は海で取れる検体が少ないので安全性を確信するだけの十分なサンプルがないから。決して50Bqを超えているわけではない。

③将来、小名浜の漁業は死んでしまうかもしれない...

現在、福島県の漁師は国から補償金を受け取っているが、無くなった時点で彼らが漁業を本格的に再開するのか？という懸念がある。



福島魚は安全だと分かったけれど、この先の「常磐もの」が心配...

* 常磐もの: いわきで取れる美味しい魚。築地水産関係者の99%が美味しいと認める。

③【シンポジウム開催】 ～子どもたちの健康の行方、放射能と環境問題～

ウクライナの小児科医やチェルノブイリ事故の被害者の支援などに携わる有識者をお招きし、現在ウクライナで問題になっている健康被害やその傾向についてお話を伺いました。また、日本側からは福島県の現在の復興の様子や根深い風評被害、その対策などについてご紹介しました。出席者は福島に状況に大変興味を示していて、特に被災者に対する補償内容や賠償金についての質問が活発でした。

■参加者

- ・チェフコ職員
- ・チェルノブイリ被害者の会スタッフ
- ・ジトーミル小児病院の医院長
- ・精神病院小児病棟の医院長
- ・消防士組合病院医院長

事故の影響として良く知られているのは甲状腺がん患者が増加したということですが、特に1998年からジトーミル州のナロジチ地区とコロステン市の子どもの罹患者が目立つようになりました。2014年までに1万600人の子どもが治療のための手術を受けています。しかし、事故後一番の問題は、先が見えない不安によるストレスでした。また、セシウム137で汚染された土地の野菜や果物、水からの内部被ばくが増え、心臓血管系に悪い影響を与えたとも考えられています。

被害者の数は年々減っていますが、それは被害が無くなったわけではなく、政府が認定する汚染地域が減ったり被災者と認められる基準が緩和したりしたためです。被災者としてのステータスが無ければ保養に行く権利や賠償金が得られません。

また、現在深刻な問題なのは病気になっても治療費が高すぎて補助金だけでは賄いきれないということです。別の病院でも話を聞いたところ、「ウクライナ人にとって一番怖いことは病気になることだ」と言っていました。日本のような皆保険制度がないウクライナでは診察費は無料でも薬代や治療費が高く、そのまま亡くなる人も少なくないと言います。



シンポジウムの参加者



ウクライナの健康被害についての発表

④行政機関訪問 ～両国の架け橋を目指して～

■訪問地

- ・ジトーミル市役所(ナタリヤ・チズ副市長)
- ・オブルチ市役所(イヴァン・コルド市長)

ジトーミル市役所へ訪問し、副市長と面会しました。2017年のウクライナと福島の交流プログラムに参加した生徒3人も同席し、日本の印象を語りました。副市長からは最後に「福島事故とチェルノブイリ事故、両国の共通した課題を思い、福島のために祈っている」という言葉をいただきました。

オブルチ市役所では市長にお会いし、オブルチの子どもたちを日本へ招待することを伝えました。市長は「福島市とオブルチ市が姉妹都市となり、今後は福島の子どもたちにオブルチを見てもらいたい」と話してくださいました。また、現在の財政危機の影響でチェルノブイリ事故の処理が国内だけでは賄えず外国から支援を受けていることや、ヨーロッパ諸国の核廃棄物を受け入れる処理所をウクライナの汚染地域内に設立したことなども伺い、事故から30年以上たった今なお多くの課題が残されていることを痛感しました。



ジトーミル副市長との面会



交流プログラムで日本に来た3人



多忙の中時間を割いてくれたオブルチ市長

⑤温熱施術 ～避難者や支援者に癒しの時間を～

チェルノブイリ被害者の会のメンバー、消防士、病院のスタッフの方々に施術しました。施術を受けに来ていただいた人たちの笑顔がとても印象的でした。中には、今回初めて温熱を受けるスタッフもいて、「こんなに良いのになぜ今までやらなかったのかしら!」とおっしゃっていました。一人一人に施術できる時間は限られていますが、少しでも皆様が元気になることを目指してこれからも続けていきたいと思えます。



温熱施術の様子

左: オブルチ消防署にて消防士へ

右: チェルノブイリ被害者の会のメンバーら



ウクライナ Ukraine



支援・調査活動

2018年支援活動は5月22～28日の1週間にわたり、ジトーミル市、オブルチ市の2地域で実施しました。主な活動内容は①子どもたちへの支援と交流、②体育の授業見学、③シンポジウム開催、④行政機関訪問、⑤温熱施術です。各施設への継続的な支援と、ウクライナが抱えるチェルノブイリ事故などによる健康被害の状況及び財政危機の深刻さを知ることができました。

①子どもたちへの支援と交流 ～成長する姿が私たちの励みです～

■訪問地

- ・ジトーミル第12学校
- ・オブルチ第3学校
- ・グラドコビッチ幼稚園
- ・精神病院小児病棟

生徒にはジブリのクリアファイル、園児にはオモシロ消しゴムを手渡しました。日本の文房具はとても品質が良いと人気で子どもたちの学習に役立てていただければ幸いです。

グラドコビッチ幼稚園の訪問日には、同園の設立55周年記念セレモニーが開かれ出席させていただきました。園児や卒園生、先生たちがそれぞれダンスを踊り住民たちに55年の感謝を伝えました。子どもたちの演技はとてもかわいらしく、彼らが元気に育つため、これからも継続的に支援ができれば良いと思っております。

精神病院では子どもたちにラジオ体操を教えたり、一緒に折り紙で紙飛行機を折ったりと簡単ではありますが、日本文化の一部を紹介し、交流を図りました。



支援物資としてクリアファイルをプレゼント
ジトーミル第12学校(左)、オブルチ第3学校(右)



大人びた表情で踊る園児



ラジオ体操に挑戦する子ども

②体育の授業見学 ～看護師配置で徹底した管理～

■実施場所

- ・ジトーミル第12学校
- ・オブルチ第3学校

2017年に訪問した際に、健康問題を抱えている子どもが多いため生徒によってできる運動が限られているという話を聞きました。子どもを支援する上でその実態を詳しく知る必要があると考え、今回の訪問では継続的に支援している2校で体育の授業を見学させていただきました。特徴としては、準備運動の時間が長く徐々に心拍数を上げる流れとなっていました。メインの運動では1回の授業で、リレーやサッカー・バスケットボールのドリブル、立ち幅跳び、バスケットボールのシュートなど様々な種目を行っていました。

しかし、見学させてもらったのは通常グループの生徒たちの授業であり、1クラスに2,3人は皆と同じ体育ができない生徒がいるので特別グループを設けているという話でした。以前ウクライナでは体育の授業中に突然生徒が亡くなったことがニュースになり、国中に衝撃を与えました。それ以来、ウクライナでは各学校に必ず1人は看護師を置くことが義務付けられました。看護師は授業中生徒の様子を観察したり、脈拍を記録したりしていました。

体育教諭は5年制の体育大学を卒業しないと免許が取れず、さらにその後も5年ごとに研修を受けて免許を更新する必要があります。教育制度は整っていますが、一方でボールなど道具の数や質が不十分であったり、体育館の床に穴が開いていたり設備の面での欠点が目立ちました。



体育の授業。まずはウォーミングアップから



運動後に脈拍を測る生徒



生徒が測定した脈拍を記録する看護師



①検査機1台 ¥10,000,000以上×11台

ゲルマニウム半導体検査機という高性能の機械を使い職員数名で検査を行っている。1日あたり約150点の検査が可能となっている。県内のお店で販売されるものは全て検査されている。

②海外からの視察受け入れ

タイや台湾はふくしま産の輸出につながる視察に数回訪れ、訪問の度にふくしま産の安全性を理解している。原子力発電所を建設中で放射能に関心が高いトルコも今後の参考に訪問した。

③施設の方からのメッセージ

「福島県は安全性をきちんと確認した上でふくしま産を出荷している。関東でもふくしま産が徐々に扱われてきているが、きちんとしたものしか出していないということをご理解ください」



福島県の農産物はもしかすると自分の県のものよりも安全かもしれない...
By この施設を訪れた〇〇県の農林関係者

創業300年 奥の松酒造を訪問



- ・奥の松酒造で扱っている原料から放射性物質は一切検出されていません。しかし、未だに「安全なお米を使っていますか?」、「水は問題ありませんか?」などの問い合わせを受けます。100%安全です!!!
- ・試飲とお土産購入はかなりの盛り上がりでした。

花月ハイランドホテル・懇親会



- ・温泉・食事・ホテルのサービスは大満足☆☆☆☆☆
- ・美味しい食事・お酒と共に「風評被害はどうすれば無くなるのか?」をテーマに参加者全員でディスカッションをしました。「スーパーで、『福島産はありますか?』と聞いてみよう」などたくさんの意見が出ました。

桃源郷・花見山



- ・とにかく「絶景」でした! 3歩進めば「インスタ映え」。
- 白黒で伝わらないのが悔しい!!!
- 「こんなに花見山が綺麗なのは2週間だけです。あとの11ヶ月は農家さんたちを手伝ったり、山を整備したり。たった2週間のためだけに私たちは一生懸命頑張っています」 by 花見山を守る会 高橋代表(中央写真)

「富岡」を知り原発問題を知る・語り部



福島第一原発と第二原発に挟まれた富岡町。語り部の仲山弘子さん(中央写真)に町内を案内していただきました。「この放ったらかしで置いてきぼりにされた町を見てもらわなければいけない」という思いで語り部になったそうです。富岡町は2017年4月に帰還困難区域の一部を除いた全地域で避難指示が解除されました。

今回のツアーのご感想(一部抜粋)

- ・様々な世代・出身の方々と話をする機会があり、おもしろかった。また、風評被害の解決に少し光が見えたような気がした。
- ・想定外の大充実だった。ほんの一部だとは思いますが福島の現状を知ることができた。
- ・花見山のお花がとてもきれいだった。原発事故の被害の様子を見る、感じる事ができた。
- ・福島の現実、復興はまだまだという現地の情報がわかった。
- ・放射能検査の様子が良く分かった。漁業が再開できると良いと思った。
- ・あれだけ検査をしているのであればもっとPRすることが必要だと思ったので周りの人たちに話したいと思った。



為になって楽しいチェフコの福島ツアー!!
来年のご参加、是非お待ちしております!!!!



ネパール Nepal



支援活動編

4月25日～5月2日にかけて、ネパールで支援活動を行いました。

2015年4月25日に発生したネパール大地震から3年が経ちました。私たちの団体は2015年5月からネパールで支援活動を始め、現地取材・調査を含め団体としては通算11回目の訪問になります。今回の活動内容は、①現地の方への温熱施術、②寄付金贈呈、③訪問先の学校および施設の子どもたちへの支援物資寄贈、④現地の子どもたちとの交流(レクリエーション・ボランティアによる魔方陣の実施)でした。

首都カトマンズ郡では2カ所の施設、カトマンズから約90km離れた所にあるシンドウパルチョーク郡では2017年4月に訪れた公立学校を再び訪問しました。

①温熱施術～ネパール人 セラピストデビュー！！温熱満足度95％！！～

今回は支援活動が始まる前に、温熱施術に興味を持った地元大学生を含む現地協力スタッフに研修を受けていただきました。早速今回からセラピストの一員として、大きな戦力となってくれました。また、今回新たな試みとして簡単なエクササイズのちらしを施術を待っている方に配布し、膝の痛みへの対処方法を紹介したところ、多くの方に関心を持っていただきました。施術ではたくさんの方にお越しいただき、特にシンドウパルチョーク郡の学校では2日間活動を行ったのでリピーターの方もいらっしゃいました。施術に対するアンケートをとった結果、満足された方が9割を超え、現地の多くの方のお力になったことを嬉しく思っております。

②寄付金贈呈～皆様のご支援のお陰です！～

里親プロジェクトでの支援先2施設へ寄付金を贈呈しました。

支援者の皆様、ご支援
大変感謝いたします!!



ラダクリシュナ
コミュニティーセンター・・・20万円



ライジングロータス・・・30万円

③支援物資寄贈～子どもたちの笑顔のために～

- ・ラダクリシュナ コミュニティーセンター：縄跳び20本／ドッジビーディスク2枚／ブランケット4枚(福島市のお母様方より寄付)
- ・ライジングロータス：ドッジビーディスク2枚／鉛筆542本・色鉛筆179本・クーピー1点(神奈川県小学校より寄付)
- ・公立 コロドウンデビ セカンダリー学校：鉛筆150本／蛍光マーカー150本

ネパールでは生活水準が低く、その影響もあり教育環境が整っていません。教育が必要な状況でありながら、学習環境が整っていないために勉強をすることができない子どもたちがたくさんいます。また、子どもの成長において様々な運動を行うことは体力的にも精神的にも非常に重要なことです。しかし、運動を行うための道具がなかったり、実施スペースが狭かったりと環境に問題があります。チェフコでは今後も学習環境、運動環境の整備を目指して支援を行っていききたいと思います。



現地人初のセラピスト誕生！



たくさんの村人が来場



鉛筆を受け取り目を輝かせる子どもたち



縄跳びできるかな～？

④子どもたちとの交流(レクリエーション)～体育の大切さを届けたい～

前回に引き続き、訪問した学校・施設で体育のレクリエーション活動を行いました。ネパールの学校では体育の授業や運動をする習慣があまりなく、学校によっても運動環境に差があります。狭いスペースでも道具があれば実施できる運動の幅が広がります。従って今回は道具を使ったレクリエーションに挑戦しました。種目は縄跳び、ドッジビー(柔らかい素材でできたディスクを使ったスポーツ)、ドッジボールです。縄跳びとドッジビーではうまくできない子もいましたが「もっとやりたい！」と楽しそうに取り組んでくれました。ドッジボールでは子どもたちはルールを覚えるのが早く、ボールもしっかり投げられていました。男女問わず積極的な姿勢が見られ、非常に盛り上がりました。また、ボランティアの方が子どもたちに魔方陣のレクリエーションを行いました。理数系が得意な子どもたちはほとんどヒントがなくても解いていきます。苦戦しつつも途中で投げ出さず楽しそうに真剣に取り組む姿にスタッフ一同感心しました。



二重跳びが難しい！



初めてのドッジビー！



素晴らしいフォーム！
容赦ない投球スピード！



魔方陣にみんな興味津々！

取材編

◆学校概要と実情

～地方の学校現場にせまる～

取材日 : 2018年4月29日

取材学校: 公立 コロドウンデビ セカンダリー学校

取材相手: シバ・ガルキ校長(32)

〈学校の概要〉

所在地: シンドウパルチョーク郡トウンパカール村

設立: 1965年

生徒数: 150人

教員数: 16人

コロドウンデビ学校には近隣のいくつかの村から子どもたちが通っています。一番多い時で300人の生徒を抱えたこともありましたが近辺に小さな公立学校が点在しはじめたために子どもが分散しています。また同校を卒業して大人になった生徒は海外や都市へ出て行ってしまったため子どもが少なくなっています。

校長によると、通う生徒の家庭は貧しいですが子どもへの教育に支障がでるほどではないと言います。文房具や制服は購入する必要がありますが日雇い仕事を少しやれば賄える程度であり基本的には現金収入がない家庭にとってもさほど苦ではないそうです。ただ、年間に1、2人程度はさまざまな家庭の事情や経済状況によってドロップアウトせざるを得ない生徒がいることも事実です。

このエリアは地震で深刻な影響を受けた地域の一つであり、近隣の家が崩れたり通っていた生徒2人が亡くなったりしています。校舎も一部が崩れましたが、政府やUNICEF、ADPというネパールの銀行関係機関による協力により修復されました。

現在生徒は山道を30～45分以上かけて毎日登校しており、雨期になれば通学がままならず休みがちになり成績に影響すると言います。学歴社会のネパールにおいて、勉強が遅れることは深刻な問題です。そのため子どもが勉強に専念できたりより遠方の子どもたちが通えたりするように寮を建設中です。

シバ校長は今後生徒の学力を伸ばす必要があると語っており、特に英語とPCスキルには力を入れたい考えです。今の時代に合った、卒業後に役に立つ知識を子どもたちに身に付けてもらいたいからです。そのため「政府には学校へのPCなどの設備をもっと充実させてほしい」と話します。保護者が望む子どもの将来の仕事はエンジニアや医者といった理系の仕事でいずれも将来性があると考えられています。逆に芸術家やスポーツ選手になりたい子どもは少なく、それにはスポーツ選手への尊敬や憧れが世間的に薄いことが関係しています。

現在教員やスタッフの数も十分ではありませんが、政府に対して教員の追加を申請できるのは生徒が200人以上いる学校のみです。そのため同校が先生を増やしたければ独自で雇うしかありませんが、雇うとなれば1人あたり5,000～15,000円(勤務形態による)が必要になります。因みに、政府が派遣している教員の給料は中学生担当で31,000円、それ以下が20,000～24,000円程度です。しかし、教員からすれば町に住むには全然足りない金額です。



1年の間に修復された校舎



未就学児の教室は机がない



薄暗い教室



バレーボールネットがある校庭
トタンの炊事場(左奥)と
未就学児の教室(右)

◆地域住民の暮らしと震災の影響～震災から3年、いまだに解決しない問題とは～

取材地 : シンドウパルチョーク郡スンカニ地区 ラタンコト村

取材日 : 2018年4月30日

取材相手: 村民

コロドウンデビ学校から車で10分ほど走ったところにあり、全部で80世帯ほどの小さな村です。この村で生まれ育った子どもたちは大人になるとカトマンズや海外に出て行ってしまおうそうで、50代以上の住民が多い印象を受けました。

震災後、土と石で造られていたほとんどの家が倒壊しましたが、政府が1世帯当たり払うと約束した30万円を満額受け取った人はおらず、話を聞く限りではどの家も20万円で滞っています。母親と2人で暮らすラトナマヤ・タマンさん(50)も補助金に加えて果物を売って稼いだり兄に支援してもらったりして3カ月前から新居の建設を始めました。もうじき雨期に入るため作業は一時的に止まりますがあと半年ほどで完成の目処が立ちます。昨年、別の村ではありますが同じくシンドウパルチョーク郡を訪れたときよりも、住民たちが自らの力で建て始めた新たな家がどんどん完成に向かっていました。別の女性も急ぎよ住むための一時的な家を造りましたが材料費などを含めて12,000円かかりました。崩れた家を1棟(2部屋)直すには100万円がかかります。仮に政府から全額の補償をもらったところで「30万円では全然足りない」と住民たちは口を揃えて言います。また、村の水回り事情はなかなか過酷で、シャワーは共有、トイレは震災前は各家にありましたが現在は共同です。

この村では多くの家庭が農家であり自給自足の暮らしをしています。現金収入を得る方法は土やセメントなど建築のための資材を運んだり、余った野菜を売ったりすることです。こうした作業は日雇いで1日におよそ800～1,000円の稼ぎになると言います。

6人の子どもをもつトウリマヤ・タマンさん(57)は学校へ通ったことがなく、当時の女性は学校へ行かず家の仕事をするのが当たり前だったと話します。「女は親の言われた通りにするだけだったのよ」と振り返りながら、子どもたちには教育を施したいと考え全員コロドウンデビ学校を卒業させたと言います。しかし同校は12年生(日本でいう高校3年生)までで、その後の進学は経済的な負担が大きいと困難です。そんな中土地を売るなどして息子1人を日本へ留学させたそうです。



トタン屋根が目立つラタンコト村



ラトナマヤさんが暮らす



5 暗い寝室



全壊した家を再建中



取材中続々と村人が集まる

お知らせ

【2018年ウクライナ & 福島交流プログラム】

2017年に引き続き、本年度もウクライナの子どもたちを福島へ招待する交流プログラムの実施に向け、参加者の選考会を開きました。今回はジトーミル市の第12学校の生徒を対象にしましたが、今回はチェルノブイリ原発事故の影響が深刻なオブルチ市の第3学校の生徒を招待します。福島の小中学校での交流やホームステイに加えて、以前から要望があった東京観光も取り入れ、日本のさまざまな面を学んでもらいたいと思います。選考の流れと合格者は以下の通りです。

《選考の流れ》

一次選考: 希望者39人が学校へ申し込みフォームを提出 (氏名、年齢、性別、志望動機、日本に対するイメージなど)

二次選考: 一次通過者の16人を対象に「日本」もしくは「日本とウクライナ」をイメージしたポスターを作製

三次選考: 二次通過者10人を対象に、「日本へ行きたい理由」「放射能に対する考え」をテーマにエッセイ

最終選考: 一から三次選考の内容とそれぞれの特技を披露するパフォーマンスをもとに、10人の面接

《結果》: 男女2人ずつの計4人が合格しました。



レヴィキヴスカ・ソニヤ
詩の朗読と歌が得意で成績優秀



コピリンスキー・フェジャ
趣味はボクシングで
日本の天皇に興味がある



ガブリロブスカ・ナスティヤ
全国1位になった名ダンサー



コシンスキー・イヴァン
動物が大好きで金魚と
オウムを飼っている

【おまけ ウクライナ料理のご紹介】

日本から遠く離れた東欧ウクライナ。そんなウクライナの料理と聞いて何を思い浮かべますか？なかなかピンとこないですよね。ところが、実は日本でも有名なボルシチはロシアではなく、ウクライナ発祥の料理です。ほかにも蒸した餃子やハンバーグのようなおかずなど意外と日本人に馴染み深い味が多いです！デザートにはアイスクリームやイチゴが多かったです。そんなウクライナの食卓を少しご紹介します。



実はボルシチには赤(左)と白(右)の2種類があります。
どちらもサワークリームを入れて飲むのが特徴！！



ウクライナ版餃子「バレーニキ」。
具はひき肉、チーズ、イチゴなど...



ハンバーグはずっしりとしていて
ボリューム満点。

ちなみに、ウクライナでは海外の料理はジョージア(グルジア)料理がポピュラーで、町にグルジア料理レストランがあったりスーパーでグルジア産のワインが並んでいたり人気の高さがうかがえました。

発行: 一般社団法人 世界の子供たちのために(CheFuKo)

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-5-1住友不動産御茶ノ水ファーストビル8階

CheFuKo通信 vol.12
2018年6月27日発行

TEL: 03-5577-3155 FAX: 03-3291-0011

URL: <http://www.chefuko.org>

E-mail: info@chefuko.org

 <https://www.facebook.com/CheFuKo/>

 https://twitter.com/CheFuKo_japan

 <https://www.instagram.com/chefuko/?hl=ja>

